はしがき

今年度もまた，本誌『古典古代学』（第 12 号）をここに公刊できることは大きな喜びである．

本号には 5 本の論考を収めることができた．これは創刊以来，第 8 号に次いで 2 度目のことである．ヴァイタリティー溢れる若き執筆者たちに，敬意と謝意を表したい．

第 1 論文の執筆者，永井悠斗氏は，現在筑波大学大学院人文社会科学研究科哲学・思想専攻一貫制博士課程に在籍し，ゾロアスター教研究・インドのマガ研究を専門とする新進気鋭の宗教史学者・文献学者である．氏は，新年度から日本学術振興会の特別研究員 DC2 となることが内定している．氏の一層の活躍に期待したい．

第 2 論文の執筆者，佐藤慎一郎氏は，筑波大学大学院人文社会科学研究科国際地域研究専攻修士課程をこの春修了した美術史家・イタリア史家である．本誌には，レオナルド・ダ・ヴィンチ研究をめぐる氏の修士論文から，その中心となる部分を投稿してくれた．手稿本研究の成果を美術史研究に活用する氏の方法に注目したい．

第 3 論文の執筆者，石田隆太氏は，本誌第 8 号から継続しての投稿となる．氏はトマス・アクィナスの研究から出発し，本邦では未開拓の領域に属するフランシスコ会学派の研究に，新たな地歩を築きつつある．

第 4 論文の執筆者，菊地英里香氏は，創刊号から毎号執筆を欠かすことのない研究者である．ハインリヒ・クラーマーに始まり，ヨーハン・ヴァイヤーを経てジャン・ボダンに至る悪魔魔女学の系譜については，著書の刊行を期待する声が高まっている．

ここに収められた諸論考がカバーする言語は，サンスクリット，ギリシア語，ラテン語，ヘブライ語，イタリア語，フランス語など多岐にわたる．『古典古代学』創刊時に目標とした，古典語と人文主義を基盤に「時」を洞察できる若者を育む教育が，つくばの地で少しずつ実りつつあることを実感できるのは，編集主幹としてこの上なく喜ばしいことである．

引き続き，読者諸賢の心ある支援をお願いする次第である．

2020 年 3 月 25 日

筑波大学人文社会系　教授

秋山　学